

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第787号 平成26年8月15日

無敵の人（2）

5月25日、岩手県滝沢市の産業文化センター「アピオ」で行われたAKB48の握手会で、のこぎりを持った男が暴れ、メンバーとスタッフ合わせて3人が病院に搬送されるという事件が起こりました。

事件を起こした青森県十和田市の無職梅田悟容疑者（24歳）は、岩手県警によって現行犯逮捕されていますが、彼もまた「無敵の人」の一人といわれています。

「無敵の人」と呼ばれる若者達は、家族や友人、仕事といった、失っては困るものを持っていません。

勿論、彼等にも家族は有り、2008年に秋葉原で無差別殺人事件を起こした加藤智大容疑者の実弟が自殺したというように、「無敵の人」の振る舞いで、彼の家族は想像を絶する影響を受けているはずですが、しかしそれでも、「無敵の人」には、家族を含めて「失ったら困るものが有るという実感」を持っているようには思えません。もっといえば、自分の命さえどうなっても良いと捨ててしまっている、それは恐ろしい程に荒涼とした世界です。

失うものがないというのは、後顧に憂いがないという事です。自分の命さえ捨ててかかれば、どんなに危険な冒険であってもチャレンジ出来るでしょう。そういう意味では、失うものがないというのは、極めて強力な武器といえます。

しかし、強力な武器を持っている事と、その人自身が「無敵」である事とは、必ずしも一致するものではありません。

その人が「無敵」であるといえるのは、「向かう所敵なし」という状況にある事、つまり、闘っている相手は、「無敵の人」と対等に渡り合えるような強力な力でなければならず、少なくとも、非力な子どもや全く戦う意思のない人を闇討ちのようにして倒したからといって、誰もそのような人を「無敵の人」とはいわないでしょう。

その意味からすれば、私は、「黒子のバスケ脅迫事件」や「秋葉原の無差別殺人事件」を起こした若者達に「無敵の人」という冠を被せる事が果たして正しいのだろうか、疑問を感じます。

「無敵の人」と称される若者達の、その生きて来た人生や置かれている環境が恵まれたものではなく、希望の持てない状況に置かれているとしても、しかし、そうした状況にある若者達が皆、無差別に他者を傷付けるような犯罪に走るかといえばそうではありません。むしろ、置かれている逆境を跳ね返そうと必死にもがき、努

力している若者達の方が圧倒的に多いと思います。そういう若者達の目には無関係な人を一方的に傷つけるような犯罪行為に対して、「戦う相手が違う」と映っているのではないのでしょうか。

私には、「無敵の人」は、本当は「無敵」なのではなく「自暴自棄の人」といった方が良いと思っています。

渡辺被告は、意見陳述書の中で「自分は拘置所から借りたスウェットを着てこの場（法廷）に立っていますが、それはつまり自分には公判用のおめかし用の衣類を差し入れてくれる人など誰もいないという意味です」と述べていますが、彼の孤立感と絶望感の深さを、改めて感じさせられます。

そうした孤立感や絶望感に打ちのめされるようにして生きている若者達に、ただ悪い事はするな、まっとうに生きろと諭すだけでは、渡辺被告が「無敵の人は増えこそすれ減りはしないと」警告しているように、事態は何も改善しないと思います。

格差是正という言葉とは裏腹に、むしろ格差は拡大しているように感じます。人々の間に蔓延する閉塞感には、ただならぬものが有ります。そうした状況を打破し、少なくとも、次代を担う若者達が夢と希望を持ち、安心して生きて行けるような社会を作る事、そこに向かって、政治も行政も力を集中して努力する事、この事の他に問題解決の糸口があるとは思えません。（塾頭：吉田 洋一）